

日本細菌学会 関東支部ニュース

第18号

第68回日本細菌学会関東支部総会の開催にあたって

この度第68回の日本細菌学会関東支部総会を開催することになり、鋭意準備を進めております。御承知のとおり関東支部は日本細菌学会会員の約半数、1600人の会員を有しており、単独でも有数の学会に相当すると考えられます。歴代の支部長先生はじめ評議員やその他多くの先生方のご努力で、支部活動が近年にもなく、また活発になって参りましたことは会員の一人として誠に喜ばしいことと存じております。

関東支部は過去において秋の支部総会の他に年間2回の例会を施行した時代もあったようですが、その後は春の支部例会、秋の支部総会が定着したようです。大黒勇支部長時代にこれらが共に支部総会になりました。その後、中谷林太郎支部長時代に、春は東京近郊の総会長によるシンポジウム、秋は一般講演を含めて東京以外の総会長による2日間の開催という原則が打ち出され、しばらくの間続きました。ご承知のように、昨年よりは春秋共に会期も2日間、一般演題を募集するという方針になっております。このような支部活動の変更は、いつの時代にもその活動をいかにして活発化するかという命題に沿った議論が行なわれて、それが実行に移されて来たことを物語っています。

さて、細菌学を取り巻く現在の環境を考えてみますとき、再びこの分野を活性化する機運を盛り上げるのに絶好の時が来ているように思われます。先には急性の細菌性伝染病がほぼ制圧され、化学療法が格段に進歩したた

総会長 金ヶ崎 士朗
東京大学教授(医科学研究所)



めに、一般にはあたかも細菌感染症の全てが容易に制御可能であるかのような誤解を生みました。この分野の関心が薄れたことはいなめません。

しかしこのために、MRSAなどいわゆる平素無害菌による感染症や、結核など一旦制圧したかに見えた細菌の感染症が浮かび上がってきたのは皮肉なことで、私ども細菌学者の多くが警告してきたことでもあります。AIDS感染者や術後の患者さんなど、種々の基礎疾患を有する患者さんの細菌感染症の問題は、もう一度基本に戻って、検討し直さなければならない時期にきていると考えられます。しかも、かつては困難であった生体と細菌の関係や生体の感染防御機構が分子レベルで解析できるようになってきており、学問としても魅力のある分野になってきております。一方、世界が狭くなって輸入伝染病の問題が日常茶飯事になるとともに、経済力の強

さと相まってわが国の責任も増大し、開発途上国における衛生問題を考ざるを得ない立場にもなっていることは周知のとおりです。細菌の病原性の研究を一層進めなければならない由縁でもあります。

さて先に徳永徹支部長の時に本年の支部総会は昭和大学の島村忠勝教授と私が担当するようにとの御要請がありました。島村教授は、申請通り十分時間をとった一般演題をもって総会を組織したいというユニークな構想をお持ちでした。そこで私のほうは、感染と生体防御に関するシンポジウムを主体に一般演題も募集するとの方針をたてました。そして「宿主防御機構解析の最近の進歩」「コンプライズドホストと細菌感染」「細菌と生体のコミュニケーション」という3つのテ

マを取り上げることにいたしました。

それぞれの企画は成内秀男（東大・医科研）・中村三千男（長崎大・熱研）、島田 馨（東大・医科研）・五島瑩子（東邦大・医）、光山正雄（新潟大・医）・笹川千尋（東大・医科研）の各先生方をお願いいたしました。幸い全国規模で代表的先生方にお話しをお願いすることができ、現在のこれらの領域の大筋が把握できるのではないかと期待しているわけです。一方、一般演題の方もプログラムに見られますように、感染防御、免疫、生体防御、毒素に分類される自信作が集まり、大変興味ある最新の成果が発表されることと思います。会員の皆様多数のご参加と活発な御討論を切に期待するものです。では、11月にお会いできるのを楽しみにしております。

科学研究費補助金の大幅な増額を望む

光岡知足（東京大学名誉教授、日本獣医畜産大学教授）

科学研究費補助金（科研費）は、わが国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野における優れた独創的・先駆的な研究を格段に発展させることを目的とする研究助成費で大学等の研究者または研究者グループが計画する基礎的研究のうち、学術研究の動向に即して、とくに重要なものを取り上げ研究費を助成するものであり、大学等の学術研究を推進するための基幹的な経費である。

わが国の大学、国公立試験研究機関、産業界等を含めた全体の研究費の総額は、昭和55年から平成2年までの10年間で総額5兆2,462億円から13兆783億円と約2.5倍の増額を見ているが、その主体別内訳では会社が3倍、研究機関が2倍に増額されたのに対し、大学等は1.7倍と低く、消費者物価の上昇率から見るとむしろ減少している。

大学の研究費（施設・設備費、人件費を含む）は、平成2年度には2兆2,970億円に上っているが、そのうち65%は人件費であり、人件費を除いた研究費は、7,544億円となっている。文部省予算のうち、学術研究基盤に係る主な経費では13%の増となっているが、この間の消費者物価の上昇率に及ばな

い伸びとなっている。

わが国では、研究者が直接使用する研究費は経常研究費、科研費を柱とし、それに産業界からの多様な財源を加えた方式をとっているが、その研究費は、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの各国と比べると、総額はアメリカのついで多いが、その対GNP比は最も低く、公費負担研究費の対GNP比は主要国の半分に、研究者一人当りの研究費比もアメリカの約半分にとどまっている。

このような現状にかんがみ、学術審議会は、文部大臣からの諮問「21世紀を展望した学術研究の総合的推進方策」に対し、本年7月23日、答申し、そのなかで、「経常研究費の充実に十分配慮しながら、選択的・重点的な研究の一層の拡充に努める必要があり、特に、科研費の増額をはかるとともに、制度のありかたや運用についても、長期的・総合的視野に立って積極的に改善・充実ははかっている必要がある」と要望されている。ちなみに、科研費の予算額は、昭和57年から平成4年の10年間で266億円（1.7倍）の増を見、平成4年には646億円となっているが、新規採択率は約26%、申請額に対する交付額の比率（充足率）は約75%にとどまっている。

フォーラム

「キノロン剤は抗癌剤となるか」

愛知がんセンター研究所

安藤 俊夫

DNA トポイソメラーゼ (トポ) は DNA の高次構造の変換を触媒する一群の酵素であり、DNA 代謝における鍵酵素の 1 つと考えられる。キノロン剤は細菌のトポであるジャイレースを標的とする抗菌剤として早くから注目されて来た。キノロン剤の原型であるナリジクス酸は抗マラリア剤クロロキンをヒントに 1962 年合成されたものであり、キノロンカルボン酸という基本構造を有する事から、その後の膨大な合成研究の出発点となった記念すべき化合物である。その後、本邦企業を中心として世界的にキノロン系抗菌剤の開発は大きく進展し、強力な抗菌力を有する誘導体が次々に登場し、感染症治療に威力を発揮している。

さて、抗菌剤としてのキノロン剤の開発に当っては、細菌に対する「選択毒性」が高い事が一つの重要な指標であった。すなわち、動物に対して毒性の高いものは全く排除されて来た。しかし見方を少し変えて、動物細胞に対して毒性を持つものは抗癌剤になりうるのではないかとの発想のもとに、蓄積された膨大なキノロン化合物が再テストされ、その結果、抗腫瘍剤として有望なものが浮び上がっている。

過去 30 年に亙るキノロン剤開発の歴史から明らかになった重要な点の 1 つは、明確な構造活性相関がある事である。わずかな構造の改変がジャイレースとの親和性を変化させ、又動物細胞のトポとの親和性を新たに生じさせたりする。従来、アンストラサイクリン骨格を有するアドリアマイシンが動物のトポを阻害する抗癌剤として有用であったが、その構造改変によって同じ酵素を標的としながらも全く阻害様式を異にするアクリラルピシンや MX-2 のような誘導体がより優れた抗癌剤として開発されて来た経緯がある。万能的

抗癌剤がない現在、抗腫瘍スペクトルの異なる抗癌剤が 1 つでも多く癌治療に供される事は癌の制圧にとって極めて重要な事であり、有用な抗癌性キノロンが開発される事が期待される。本邦開発のカンプトテシン誘導体; CPT-11 や MST-16 などトポを標的とする重要な抗癌剤が登場しつつある時でもあり、トポ標的の良い抗癌剤が一つでも多く創製される事はトポの研究に関わって来た薬学徒の 1 人として大きな喜びである。

「臨床との架け橋、ヘリコバクター」

兵庫医科大学細菌学教室

林 公子

胃潰瘍、胃がんの病原体であるヘリコバクター・ピロリ (HP) は、分子遺伝学研究真っ盛りの時代に登場した細菌のニューフェイスである。

私たちは、本学第四内科との共同研究、豊富な臨床検体という恵まれた環境で、臨床の大学院生を中心に、HP の臨床分離株を用いて染色体遺伝子の相同性や GC 含量による分類学的位置付け、制限酵素パターンによる染色体塩基配列の多様性、PCR 法による検出などを行ってきた。

これらは私達が抗酸菌で行っていた初歩的技術を HP に応用したもので、今から思えば行き当たりばったりの感がしないでもない。現在は、臨床との共同研究という利点を活かした研究方向を模索中である。わたしが大学院に入学した 1980 年後半は、遺伝学的手技が広く細菌学に導入された時期であったが、教室には遺伝子を扱う設備はなく、他教室を行脚して体制を整える毎日であった。この寄集めの実験体制で、継続が難しいといわれる、臨床教室との共同研究ができたのは、皆の協力のおかげで、共同研究者に感謝する毎日である。

「私のライム病研究」

東日本学園大学歯学部

磯 貝 恵美子

ライム病はマダニ媒介性の *Borrelia burgdorferi* 及びその関連細菌によって引き起こされる病気である。日本では *B. burgdorferi* はみつかっておらず、代りにシュルツェマダニ由来の *B. garinii* 及び *B. afzelii*, ヤマトマダニ由来の新菌種が分離されている。

日本におけるライム病の現状は十分把握されているわけではなく、様々な研究課題を与えてくれる。これまで、疫学的背景を知るため、血清疫学調査を中心に仕事を行ってきた。ライム病のベクターであるマダニが高率にライム病病原体を保有することもわかった。こうしたデータからライム病は稀少感染症ではないと考えている。事実、ライム病の患者報告は増加しつつある。犬におけるマダニ咬傷後の症状発現を調べてみると、シュルツェマダニ咬傷後ではマダニのスピロヘータ保有状況に密接に関連して何らかの臨床症状があらわれるのに対し、ヤマトマダニ咬傷後では臨床症状は現れない。日本におけるライム病スピロヘータは媒介マダニを異にするだけでなく、病原性も異なるのかもしれない。

現在、最も興味を持っているのは、菌種の相違も含めて発病病理のメカニズムの解明である。“slow bacterial infection”の側面をもつライム病は多くの臓器に障害を与えるが、内毒素以外の病原因子は不明である（内毒素も存在しないという論文さえある）。ライム病患者の体内にはごく少数のスピロヘータしか存在しないにもかかわらず、多彩な症状を呈するのは何故か。免疫応答は host defence なのか組織障害なのか—そのバランスは？病気を起す人（動物）とそうでない人（動物）がいるのはなぜか。慢性化は何故起るのか？知りたいことがたくさんありすぎる。貧困（文部省の科研費あたらない記録更新中、獣医領域に申請）、辺地、場違いの研究環境（歯学部、こちらの研究もちゃんとやって、その上でライム病の研究）で、唯一のすくいはいは多くの友人とマダニに恵まれていることである。

「黄色ブドウ球菌のロイコシジンとガンマヘモリジン」

東北大学農学部応用生物化学科

神尾好是

信州大学医学部細菌学教室から東北大学農学部応用微生物学講座に転任してから早6年になりますが、私は黄色ブドウ球菌のロイコシジンについて研究しております。黄色ブドウ球菌のロイコシジンに関しては、加藤巖先生のグループが精力的に研究をなされ、数々の発見をされましたが、今日まで、分子レベルでの研究は世界の誰も、まだ手をつけておりませんでした。加藤先生にお願いして、私共がやらせて頂くことになりました。ロイコシジンはS及びFの二成分からなる蛋白毒素ですが、我々は、SとF成分の遺伝子のクローニングに着手しました。3年を費やし、やっと両成分の遺伝子構造を決定しました。この成果を文部省科研費班会議で報告した際、黄色ブドウ球菌のガンマヘモリジンもH γ IとH γ IIからなる二成分蛋白毒素であることを知り、ガンマヘモリジンとロイコシジンとの構造に関する相関性はどうかとの議論になり、早速ガンマヘモリジンの精製に入りました。驚いたことに、両毒素の化学分析の結果、FとH γ Iは同一成分であるという結論に達しました。さらにH γ IとH γ II遺伝子のクローニングの結果、予想通り（実は結果を見て、これまた驚いたのですが）両毒素はF成分を共通の成分として持ち、SとH γ IIは血球認識蛋白であることがわかりました。それぞれの遺伝子の染色体上での位置は、F成分 (*lukF*) を先頭に、1塩基上流にS成分遺伝子 (*lukS*)、そして約500塩基上流にH γ II遺伝子 (*hig2*) が存在しました。ごく最近ロイコシジンのS成分のC末端17アミノ酸残基からなる領域が毒素活性に重要であることが明らかになりました。血球崩壊機構の解明には未解決の問題が山積していますので、今後若き学生と共に頑張っ、1つ1つ解決して行きたいと思ひます。

「いわゆる“新型コロナウイルス” non-O1 *Vibrio cholerae* O 139 synonym Bengal とは何か」

城西大学薬学部

久恒和仁

Vibrio cholerae は、菌体表面に局在する O 抗原によって、O1 と non-O1 の 2 つのグループに大別される。前者の O1 *V. cholerae* が急性伝染病コレラの原因菌(cholera vibrios)であり、後者の non-O1 *V. cholerae* (NAG vibrios) は散発的な下痢症の原因となることはあっても、大規模な下痢症の流行の原因となることはなく、今までコレラの原因菌として扱われることはなかった。ところが、昨年夏、インドのカルカッタにおいて、今までの医学的常識を破って non-O1 *V. cholerae* を原因菌とするコレラの大流行が発生し、瞬間にインドをはじめバングラディッシュなどのベンガル湾沿いのいわゆる Indian subcontinent とタイへと拡大し、今やコレラの第 8 次世界的大流行(pandemy)にまで発展するのではないかという怖れを WHO その他の関係機関に抱かしめるまでになっている。本菌は、O1 抗血清だけではなく non-O1 *V. cholerae* のすべての既知 O 抗原型(138 種)に対する抗血清のいずれによっても凝集せず、国立予防衛生研究所の島田俊雄博士によって *V. cholerae* O 139 synonym Bengal と assign された。本菌によって発生するコレラの特徴は、在来のコレラに比してその死亡率が高く、また成人の罹患率の方が子供のそれよりも高いことが挙げられる。さらに本菌は、O1 *V. cholerae* の 2 つの生物型 [古典型(あるいはアジア型)とエルトール型] のうちエルトール型としての性状を顕著にもつと同時に、高いコレラ毒素産生能をもっている。驚くべきことは、昨年の 11 月以降、それまでカルカッタにおいて多少ともコレラ患者から O 139 とともに分離されていた O1 *V. cholerae* が完全に O 139 によって置換されたことである。これは全く前代未聞の現象で、*V. cholerae* O1 から O 139 への分子遺伝学的な変換の可能性が論じられている。現在、筆者の教室は本株から精製した O 抗原のリポ多糖(LPS)の O 特異多糖部の化学的構造解析に全力を傾注している。

「熱ショックタンパク質(HSP)に寄せる想い」

筑波大学基礎医学系微生物

太田敏子

私は長い間、世界を隔てている細胞膜という境界線の部署で働くタンパク質に魅せられて生活を共にしてきた。ある時、Nature 誌の論文を読むように渡された。それには、それまで私がおもっていたタンパク質像をくつがえす衝撃的な事が述べてあった。できたてのポリペプチドが折りたたまれ、生体内で意味をもって機能していく仕組みを明らかにする鍵が HSP にあった。これが私と HSP の出会いであり、“セカンドラブ”の始まりであった。

個々のタンパク質分子は、誕生直後から所定の場所へ移動し、成熟し、伴侶や仲間との出会い、仕事、病気、そして老後、役目を終えた後の分解という一生をたどる。この誕生したペプチドを取り上げ、移動、成熟を助け、病気を治し、死を看取るという面倒みの良い熱ショックタンパク質(HSP)と呼ばれる一群のタンパク質の存在が明らかになった。これが分子シャペロンである。細胞内には、こうしたいわば社会福祉の制度が発達しているらしい。この数年続々とその機能が明らかにされ、これまでは予想もできなかった細胞内のタンパク質同士の付合いの様式が解き明かされつつある。分子シャペロンは結合するタンパク質の種類を問わず、共生や感染などの他人が共存する場合に双方が認識しあえるように助けることからフェジーな抗体様機能が予想される。こうしたフェジーな機能がその面倒みの良さの由縁であろうと思われる。

私はまたひょんなことから黄色ブドウ球菌と付合うことになった。薬剤などいろいろなストレスに適応し易い黄色ブドウ球菌のフェジーな性質はどこか分子シャペロンの性質と似ている。これが黄色ブドウ球菌の HSP の研究に手を染めるきっかけとなった。この菌の各種 HSP の遺伝子をクローニングした今、私の“セカンドラブ”はその深みを増していくのである。この研究の展開は未知数であるが、私の寄せる期待は大きい。今後さらに驚くべき生理機能が明らかにされ、我々の常識をくつがえしていくことであろう。

「病原性ノカルジアと抗生物質」

千葉大学真核微生物研究センター化学療法

三上 要

放線菌は抗生物質生産菌として良く知られているが、病原性の菌種が存在することは、あまり知られていない。最近の免疫抑制剤の乱用とともに、本邦においても本疾患は増加傾向にある。病原性の放線菌としては *N. brasiliensis* グループおよび *N. asteroides* グループ（ここでは便宜的に2つに分けた）が代表的なものである。しかし、多くの検査室で菌の同定が煩雑なため、我々の研究グループに同定が持ち込まれるケースが多く、年間30例近くに達している。これらの臨床分離株を使った研究で、最近いくつかの興味ある知見が得られているので紹介してみたい。

その一つは、奇妙な話であるが患者由来ノカルジアの抗生物質生産の話である。実際には、患者由来の *N. brasiliensis* グループから抗癌剤として有名なアドリアシンに似た新物質をはじめ、いくつかの抗生物質を見出して報告した。そこで、さらに多くの *N. brasiliensis* 株について検討した結果、多くが抗微生物活性を示す物質を生産していた。しかし、*N. asteroides* グループでは抗生物質の生産は認められなかった。何故、*N. brasiliensis* だけが抗生物質を生産するのかは明らかでない。これらのノカルジアは抗生物質の合成能を残したまま病原性を獲得したのだろうか。

2番目は耐性のお話である。*N. brasiliensis* は種に特異的な耐性パターンを示した。その耐性機構を解明した結果、カナマイシンやエリスロマイシンのリン酸化（グルコシル化も）、また、これまで報告のないリファンピシンのグルコシル化やリン酸化等極めて多岐にわたっていた。*N. brasiliensis* は多くの抗生物質の生産菌であり、従って生合成遺伝子を持っている。また、生合成機構と耐性機構では共通の部分があることは、既にわかっている。*N. brasiliensis* の分子遺伝学的研究は、薬剤耐性の起源のみならず、薬剤耐性と抗生物質生産とについて面白い情報を提供してくれそうである。

「消毒剤雑感」

東京薬科大学第二微生物学

河野 恵

1984年、オーストラリアで始めて塩化ベンザルコニウムや塩化ベンゼトニウムなどの4級アンモニウム系消毒薬耐性 MRSA の存在が認められた。消毒薬耐性 MRSA は消毒薬耐性遺伝子 (*abr*) をもっており、その一部は混合培養で MSSA へ移ることも明らかにされた。全国レベルの調査で MRSA の約40%が消毒薬耐性という成績であった。さらに、最近では遺伝子重複 (*abr-abr*) による高度耐性化が明らかになっている。

1956年、多剤耐性赤痢菌が初めて報告され、感受性菌への多剤耐性の伝達 (1959, 1960) による伝播が大きな問題となり、薬剤耐性の問題が注目されるようになった経緯がある。今、MRSA の出現に対して、(1) 抗生物質など化学療法剤の適切な使用、(2) 病院環境の改善、(3) 消毒の徹底が強く求められている。

最新の「第12版・日本薬局方」にはフェノール系消毒薬は削除され、従来の4級アンモニウム系消毒薬、クロルヘキシジンなどのピグアナイド系消毒薬にポビドンヨードなどのヨウ素系消毒薬などが新しく追加されている。

市販されている消毒薬の種類は多種多彩である。すぐ消毒薬の内容を説明できる人は医療関係者でも少ないと思われる。大変なことは「消毒薬には抗菌スペクトルがある」ということである。

抗生物質には抗菌スペクトルがある、と同様に消毒薬にも抗菌スペクトルがある。抗生物質多剤耐性 MRSA に対する適切な抗生物質の使用が望まれる、と同様に消毒薬多剤耐性 MRSA に対しても適切な消毒薬の使用が望まれるのである。抗生物質の適切な使用には薬剤の種類と投与方法が含まれる。消毒薬の適切な使用にも薬剤の種類と使用方法が含まれる。消毒薬の使用について医療関係者がどれほどの確かな情報を持ち、実践しておられるであろうか。紙面をお借りして私見を述べさせていただきます。

「マクロファージ雑感」

国立予防衛生研究所免疫部

赤川 清子

マクロファージ (Mφ) は、下等動物から高等動物まで広く存在し、殺菌や異物の食食、消化をその主たる役目としている。しかし、それが存在する生体の進化とともに Mφ も進化し、現在では、抗原提示、腫瘍細胞傷害、骨の吸収と形成、脂肪の代謝、分泌作用など多彩な機能を獲得し、生体の防御機構や恒常性の維持に重要な役割を果たしている。そのため肝のクッパー細胞、脳のミクログリア、骨の破骨細胞、肺の肺胞 Mφ というように名前の違いとともに、形態、機能、表面マーカーなどが一様でない。この多様性が実は、Mφ の研究を複雑困難なものにしている原因の一つであるが、同時に研究対象としては非常に興味深い細胞である所以でもある。この Mφ の多様性が生じる原因はいくつか考えられるが、その一つに Mφ 形成に関わる CSF の違いがあり、肺組織に古くより多量の存在が知られていた GM-CSF が、実は肺胞 Mφ の形質を規定していることを見つけた。人間性の形成も環境に依存することが多いことは昔より言われているが、細胞レベルでも同じ社会法則が働いていることが解る。

最近、肺胞 Mφ のみならず、破骨細胞様多核巨細胞や抗原提示のスペシャリストである樹状細胞を、ヒト単球より *in vitro* で誘導することができた。その分子機構はまだ不明であるが、単球や Mφ は考えられている以上に分化の可塑性を有した細胞であるように思える。学生の時アヒルとニワトリの口バシ原基のキメラを作り、アヒルの口バシ上皮の特殊構造は真皮からの分化誘導刺激を受け形成されるものであることを明らかにし、その機構解明をめざしていた。ここ数年、形態形成機構の解明は飛躍的に進歩し、それに関与する増殖分化因子やそのレセプター、ホメオ遺伝子などが明らかになりつつあり、分子レベルで説明可能になりつつある。今アヒルの口バシを Mφ に代え、その分化機構を明らかにし、できることなら人工的にその分化を modulate し、感染防御や免疫応答に有利に生体を維持できればと考えている。

「日本細菌学会の活性化に思う」

聖マリアンナ医科大学微生物学教室

嶋田 基五郎

細菌学は個々の細菌について目が眩む程の研究業績を積重ねて研究内容は深遠且つ細分化され、門外漢の立入る余地は少ない。従って、研究者が益々孤高の人となる傾向は否めない。その結果、研究は盛んになったが学会は低調であると言った自虐的な意見すらある。小生は本学会に入会してから3年目の新参者で、客観的に物を言える立場ではないし、それだけの見識もない。以下は、新入社員の感想文と読んでいただければ幸いである。

さて、小生は昭和38年以来、内科医として一般細菌感染症の基礎と臨床を研究対象としてきた関係上、長い間細菌学会の秀れた先生方から御指導、御高配を賜ってきた経緯もあり、会員の中には知己も多く、本学会の新人でありながら学会ではセッション座長を拝命するなど過分な栄を賜っている。それだけに、恩返しのつもりで微力を尽そうと鋭意会場に臨むが、そのセッションで発表される施設の先生方以外の参加者は極めて少なく、当然のことながら討論も少ない。更に残念なことは、発表を終了した施設の先生方は次々に会場を去り、セッション最後の発表時には、その施設の先生方以外の聴衆はなく、さながら教室での練習会である。一年間の研究成果を発表する晴れの舞台としては誠に惨めである。その原因は、研究内容を相互に理解できないことに尽きる。それが証拠に、基礎と臨床の接点にテーマを置いたシンポジウム会場は立錐の余地もないほどに活況を呈し、その落差は余りにも大きい。学会の活性化とは何か？細菌学会の研究目的は何か？価値観の多様化している現代において、これらを性急に問えば姑息的なものも含めて様々な意見が乱舞し、将に百家争鳴となろう。しかし、材料は出揃う。それらを継続して真摯に討論し、結論が出たところから、年毎の会長がテーマを選定し、それに沿った研究を要望したらどうか。勿論、研究は自由であり、それに答えることも大切である。しかし、討論が得られる域にまで練り上げるべきであろう。

学会発表の喜びの一つは反響にある。

集 会 案 内

- 第14回食品微生物学会
日時：平成5年11月11, 12日(木, 金)
場所：静岡市民文化会館 〒420 静岡市駿河町2-90 ☎054-251-3751
問合せ先：〒420 静岡市北安東2-27-2
静岡県衛生環境センター微生物部 赤羽荘資 ☎054-245-0201
- 第27回腸炎ビブリオシンポジウム
日時：平成5年11月18, 19日(木, 金)
場所：KKR ホテル大阪 〒540 大阪市中央区馬場町2-24 ☎06-941-1122
問合せ先：〒537 大阪市東成区中道1-3-69
大阪府立公衆衛生研究所 石橋正憲 ☎06-972-1321 (内線359)
- 第2回腸内フローラ・シンポジウム－腸内菌と発癌－
日時：平成5年11月29日(月) 10:00～16:30
場所：ヤクルトホール
問合せ先：〒105 東京都港区東新橋1-1-19
ヤクルト・バイオサイエンス研究財団 ☎03-3574-8986
- 第5回臨床微生物学会
日時：平成6年1月22, 23日(土, 日)
場所：大分東洋ホテル 〒870 大分市田室町9-20 ☎0975-45-1040
演題締切：平成5年9月30日
問合せ先：〒879-55 大分県大分郡狭間町医大ヶ丘1-1
大分医科大学第二内科 後藤陽一郎 ☎0975-49-4411 (内線2804)
- 第28回緑膿菌感染症研究会
日時：平成6年1月28, 29日(金, 土)
場所：鹿児島城山観光ホテル 〒890 鹿児島市新照院町41-1 ☎0992-24-2211
演題締切：平成5年11月29日
問合せ先：〒890 鹿児島市宇宿町1208-1
鹿児島大学医学部泌尿器科 川原元司 ☎0992-75-5395
- 第9回環境感染学会総会
日時：平成6年2月18, 19日(金, 土)
場所：九段会館 〒102 千代田区九段南1-6-5
演題締切：平成5年10月30日
問合せ先：〒235 横浜市磯子区汐見台1-6-5 神奈川県衛生看護専門学校付属病院
第9回日本環境感染学会総会事務局 高橋孝行 ☎045-761-3581 (内線330)
- 第24回嫌気性菌感染症研究会
日時：平成6年3月5日(土)
場所：エーザイ新館ホール 東京都文京区小石川4-6-10 ☎03-3817-5185
演題締切：平成5年12月25日
問合せ先：〒141 東京都品川区東五反田5-9-22
関東通信病院臨床検査科 岡田 淳 ☎03-3448-6410
- 第7回臨床微生物迅速診断研究会
日時：平成6年5月13日(土)
場所：愛媛県医師会館 〒790 松山市三番町4-5-3 ☎0899-43-7582
演題締切：平成6年1月31日
問合せ先：〒500 岐阜市司町40
岐阜大学医学部嫌気性菌実験施設 加藤直樹 ☎0582-65-1241

〈集会報告〉

1. Mechanisms of Microbial Diseases の編者 Moselio Schaechter 教授の講演会は、平成4年2月4日火曜日午後2時から東京大学医科学研究所本館会議室において開催された。東京在住の会員を中心に約40人が集まり、Equivalent of mitosis in bacteria の題で、細菌分裂時におけるDNAの配分についての講演を拝聴した後、活発な質疑応答が行なわれた。同教授は米国微生物学会の会長を勤めた方であり、ASMと日本細菌学会との交流を強く望まれた。このため、会議後、本学会理事長小沢敦東海大学医学部教授との会見がアレンジされた。(医科研、金ヶ崎)

2. 第4回プロテインA研究会は平成4年6月5日に、昨年と同じく慈恵医大の同窓会館で行なわれた。本研究会の設立目的はプロテインAを基礎的あるいは応用的に研究の対象としている人々が気楽に話し合える場を用意するもので、一般演題は簡単なポスターとし、昼食を兼ねてビールを含んだ軽食をとりながら、インフォーマルなかたちで討論を行なうという形式をとっている。当日は30名ほどの参加者があり、日本医大の大国先生の溶連菌のキナーゼ、都立衛生研究所の五十嵐先生による黄色ブドウ球菌のコアグラゼについての簡単なレビューの後に、一般演題のポスターを前に、めいめい、好みの軽食を手にもちながら、自由に討論を行なった。今後プロテインA以外にもプロテインGなども対象として内容を充実させ、規模は小さくとも意味のある会として、しばらく続けていきたいと考えている。(慈恵医大、増田)

3. 第8回細菌の病原性の分子遺伝学研究会平成4年7月24日(金)に東大医科研講堂において開催された。今回の主題は、「応用開発研究の現状と将来展望」で、若手研究者を中心に130名以上の参加があり、盛会裏に終了した。笹川千尋、山本達男、檀原宏文、牧野壮一、古賀敏比古および井上松久先生の講演が行なわれた。本研究会は、他の研究会と異なり、会員制をとっていない。会則はなく、会費もとらず、会の運営費は細菌学会関東支部からの補助と当日のカンパ(特に強制せ

ず、500～1000円/1名)で成り立っている。発足当初の自由意志の研究会といった趣旨から、主催者の手造り、手弁当の研究会であることが特徴である。来年度は筑波大林英生教授の世話人で開催されます。

(農水技術会議 寺門)

4. 第21回薬剤耐性菌シンポジウムは平成4年8月27、28日の両日伊香保観山荘で行なわれた。今年で21年を迎え、対象として取上げられる細菌と薬剤は時代とともに変遷して来た。メンバーも交代してきたが、第1回以来の会員も数十名いる。現会員は約300名で、内120名がシンポジウムに参加した。

今回の話題は、MRSAと緑膿菌の、院内汚染の問題、耐性の生化学的遺伝学的機序であり、一般演題21題のうち14題を占めた。その他、薬学、水産学、歯学領域からの*Bacillus*、*Vibrio*、*Klebsiella*、*Streptococcus*の薬剤耐性についての発表があった。特別講演は、札幌医大泌尿器科熊本悦明先生による、抗菌剤MICのbreak pointについて、臨床の立場から導かれた理論に基づく興味ある話であった。

このシンポジウムの特徴は、薬剤耐性菌についての様々な立場からの問題を、十分に時間をかけ、温泉に泊り込みで議論できることにある。貴重な情報交換の場でもある。

シンポジウムの内容の充実と一層の発展をはかるために、次年度からは、運営委員を決め、回毎に会長を交替することにした。今後の発展を御期待下さい。(群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設 伊豫部)

議 事 録

第2回評議員会

日時：平成4年5月9日(土)14時～17時

場所：昭和大学

出席者：五十嵐英夫、池田達夫、井上松久、伊予部志津子、内山竹彦、岡本 登、金森政人、北野繁雄、黒坂公生、河野 恵、笹川千尋、島田俊雄、竹田多恵、檀原宏文、鶴 純明、野沢龍嗣、辨野義巳、三上 裏、光岡知

足, 金ヶ崎士郎 (第 68 回関東支部総会長),
島村忠勝 (支部長), 江川 清, 戸田真佐子
(幹事)

欠席者: 新井俊彦, 奥田克爾

議題:

1. 島村支部総会長より第 67 回支部総会の準備状況の説明がなされた。
2. 金ヶ崎支部総会長より第 68 回支部総会の準備状況の説明がなされた。
開催日: 平成 4 年 11 月 5, 6 日 (木, 金)
会場: 東京大学医科学研究所講堂
国立公衆衛生院講堂

シンポジウム

1. 宿主防御機構解析の最近の進歩 (5 日)
司会: 成内秀雄, 中村三千男
演者: 大海忍, 赤川清子, 垣内史堂, 吉開泰信, 西岡久寿弥, 野本亀久雄
2. コンプロマイズドホストと細菌感染 (5 日)
司会: 島田馨, 五島瑛智子
演者: 倉辻忠俊, 斧康雄, 小沢敬也, 木村哲, 辻明良, 中野昌康
3. 細菌と生体のコミュニケーション (6 日)
司会: 光山正雄, 笹川千尋
演者: 笹川千尋, 光山正雄, 牧野壮一, 江崎孝行, 水口康雄, 金子誠二, 戸部亮

一般演題申し込み先: 東京都港区白金台
東京大学医科学研究所細菌感染研究部内
第 68 回日本細菌学会関東支部総会事務局

締切日: 平成 4 年 8 月 31 日 (金)

予稿集: 購入予約締切: 平成 4 年 9 月 10 日

予約価: 1000 円

会務総会: 11 月 6 日, 懇親会: 11 月 5 日

3. 学術委員会より第 69, 70 回支部総会長候補者が推薦され, 審議後選挙の結果
第 69 回: 川上正也 北里大学教授
第 70 回: 長田恭明 第一製薬中央研究所長
と決定されました。

4. 竹田編集委員より委員会報告
編集方針アンケート結果, 17 号原稿依頼
5. 第 1 回評議員会議事録の承認

<人事消息>

池 康嘉先生 群馬大学医学部微生物学教授
に就任, 部内 (助教授) より昇任。

平松啓一先生 順天堂大学医学部細菌学教授
に就任, 部内 (助教授) より昇任。

<訃報>

清水文彦先生 独協医科大学名誉学長 (84 才)
平成 4 年 4 月 28 日心筋梗塞により逝去。

御自宅: 太田区南馬込 6-30-9 ☎ 03-3753-1496

椿 精一先生 元北里研究所理事 (78 才)

平成 4 年 5 月 14 日胸部大動脈瘤破裂で逝去。

添川正夫先生 元北里研究所副所長 (83 才)

平成 4 年 5 月 25 日呼吸不全により逝去。

大橋 誠先生 前東京都立衛生研究所所長
(61 才) 平成 4 年 6 月 20 日肝不全により逝去。

御自宅: 川崎市麻生区東百合ヶ丘 1-14-3

☎ 044-966-1290

松橋 直先生 東京大学名誉教授,

元国立予防衛生研究所部長 (70 才)

平成 4 年 8 月 5 日膵臓癌により逝去。

御自宅: 川口市幸町 2-6-4 ☎ 0482-52-5181

◇ 編集後記 ◇

まだ残暑の厳しい研究室で, 編集会が開かれた。支部評議員会での話題も極力掲載させて頂くことにした。支部会でも「学会の活性化」が重要課題。会員の拡大と研究費対策に向けて議論は白熱する。その熱気を本紙に盛ることが編集部の責任と思っている。しかし, その理念を口で語ることは容易でも具体策は意見が分散。学会の本質, 使命について改めて考えさせられる。知的好奇心を満足させてくれる学会づくり, そんな良策についてぜひご意見をお寄せください。(T. T.)

日本細菌学会

関東支部 ニュース

第 18 号

(1992. 10. 1)

発行: 日本細菌学会関東支部

〒142 東京都品川区旗の台 1-5-8

昭和大学医学部細菌学教室内

☎ 03-3784-8131
